

## マチレク会議

期日：平成25年11月5日（火）19：00～21：00

会場：角筈区民ホール（新宿）

主催：公益財団法人日本レクリエーション協会

### 1. 基調講演「若者の地域社会参加を促すには」

講師：山崎亮（studio-L 代表、京都造形芸術大学教授）

- 美術館のチラシは誰にでもわかりやすいレイアウト。月に1回美術館の企画展チラシをまとめて持ち帰り、ファイリングしておくといい。
- 余白や文字の幅、絵の配置等まったく同じレイアウトでチラシを作ってみると、見やすいデザインのコツが分かってくる。
- デザインは、自分たちのジャンルと無関係の第三者に関心を持ってもらうために重要。
- 重要なこと（イベント名や日時、会場、テーマ等）は、すべてチラシ全体の上3分の1に書いておく。イベントや事業のテーマカラーを決めておくことも大事。
- 前回のワークショップの内容をどのようにまとめ、報告するかで、次回へのモチベーションが変わる。（図式化したり絵にしたり。文字ばかりの議事録を読み上げるのはナンセンス）
- 作業中や会議後の「雑談」は、面白いネタの宝庫。忘れないうちにメモしてもらうといい。
- 瀬戸内国際芸術祭で、瀬戸内の島を訪れた。家島では、もう使えない冷蔵庫を畑の道具入れにするなど不要になったものを活用する技術に長けていたのが印象的だった。
- 瀬戸芸では、「作品をつくる事」ではなく、「作品をつくる中で生まれた繋がりがコミュニティが作品である」というスタンスで、小豆島に協力した。結果、「ひしお（醬）会」という新たなコミュニティが誕生した。
- 「待ち」から「町」へ。外へ飛び出していき、出会った人とまた戻ってくる。すると、新たな発想が生まれる。
- 来年4月から、東北芸術工科大学（山形県）に「コミュニティデザイン学科」を新設する。山崎氏が学科長就任予定。

<http://www.tuad.ac.jp/community/about/index.html>

## 2. パネルディスカッション「スポーツ・レクリエーションで地域を元気にする」

コーディネーター：松尾哲矢（立教大学コミュニティ福祉学部教授）

パネリスト：鹿内葵（NPO 法人スポネット弘前クラブマネジャー）

馬見塚健一（一般社団法人スポーツ GOMI 拾い連盟代表）

山崎亮（studio-L 代表、京都造形芸術大学教授）

- ・若者がスポーツ・コミュニティに関わらないのは、それが閉鎖的だからかも。

### <NPO 法人スポネット弘前 事例紹介>

- ・「少子化が進み、種目を選べる環境にない」「大人が気軽にスポーツできる環境をつくりたい」という思いが原点。
- 会員数530名のうち、～30代の会員は350名。スタッフ会員60名のうち～30代の会員は40名。また、会員の70%が「クラブに入るまで何のスポーツもしていなかった」という人。
- ・若者には、単なるお手伝いではなく、クラブのミッションをしっかりと伝える。
- ・若者の「やりたい！ やってみたい！」を否定せず、まずはやらせてみる。若者の自己実現のために資金を引っ張ってくるのも、クラブマネジャーの仕事。
- ・スタッフには、「絶対に仲間内だけで固まらない」よう呼びかけている・
- ・スタッフと弘前大学、弘前医療福祉大学の学生が連携して、学際でイベントを実施。
- ・敷居が高い、スポーツの価値観を変えることを夢見ている。

### <一般社団法人スポーツ GOMI 拾い連盟 事例紹介>

- ・2008年に東京都で誕生。現在、全国で180回以上、2万5千人以上が参加している。
- 1チーム5人、制限時間は1時間、チームごとに決められたエリアでごみを拾う。1チームに1人審判が付き、拾ったごみをポイント化する。
- ・新潟県で開催した際、参加した小学生が「面白かった！」と自分の小学校で開催。学校ではごみの数も街中に比べて少ないので、落書きを消したらポイントを付ける…など工夫して、その後も継続的に実施。
- スポーツ GOMI 拾い連盟から小学校に表彰をした。

### <ディスカッション>

1) それぞれの年間予算は？

鹿内：2600万円ほど。うち半分以上は、クラブ会費・参加費による自己財源。事業によっては助成金を活用している。

馬見塚：開催地から、開催費用をいただいている。参加費も無料。

2) 若者を引き込むコツは？

鹿内：若者の「やりたい！」を否定しないこと。否定的な組織には、人は集まらない。また、チラシには「スポーツ」という単語をあまり載せないようにしている。

馬見塚：「社会貢献をしたい！」という大学生を巻き込んだ。連盟事務局は必ず大学生にしている。（大学を卒業したら連盟も卒業）

山崎：今どきの若者は、①楽しい、②誰かのためになっている、①・②両方のバランスを重視しているように感じる。これからは、ただ「楽しい」だけでは興味がひけなくなるかもしれない。

鹿内：駅前にある人気のない公園で、ラジオ体操と早朝ヨガを実施。駅付近のホテルにも宣伝すると、観光客もやってくるようになり、地元民と観光客の交流場になった。

馬見塚：自分も、出張先で早朝ランニングをするのが好き。ある時、訪れた観光地にゴミが溢れていたことにショックを受けた。そのうち走りながら拾える範囲でゴミを拾うようになり、いかに早く拾えるかに挑戦するようになり…気付くとゴミが「汚いもの」ではなく「ターゲット」になっていた。ゴミ拾いをスポーツ化しようと思ったのは、思えばこれがスタートだったかもしれない。

山崎：例えば、ホテルが独自に早朝ランニングを実施した場合、参加者が集まらないかもしれないという懸念があるが、地域ですで行っているコミュニティであれば、観光客も安心感がある。

鹿内：結局、体育館にはスポーツをする人しか集まらない。どこでやるか工夫するだけで新たな繋がりが生まれる。

馬見塚：現在、北海道小樽市で、あまり雪に縁のないASEANの国々を対象にした「スポーツ雪かきプロジェクト」を計画している。

山崎：やっていない人、その分野について知識のない人に「どう見せるか」。

3) 最後に一言ずつお願いします。

鹿内：オリンピックメダリスト等とは違う、スポットライトの当たらないところに陽を当てたい。今どきはコミュニティを持たない若者も多い。大人は、そんな孤独な若者が安心して飛び込める組織づくりをする必要がある。

馬見塚：自分の思いを伝えることができるコミュニティづくりが大切だと思う。

山崎：組織内の連携＝排他的になってはいけない。

何事もまずは真似から。100～200個の事例を浮かべて、自由に組み合わせると、元ネタは分からなくなる。その事例収集も、スポーツと思えばいい。例えば、5分間で出来る限りの事例を集めて発表→ポイント化し、また違う事例収集…とすれば楽しくなる。

## 写真

